横手市（よこて）

（秋田県）

発展の基盤は無限の価値を持つ地域資源の磨き上げ!!
産業振興＋環境調和の暮らしが育む未来への灯



横手城址のある朝倉山の脇を通り横手市街を流れる横手川。晴れた日には鳥海山が望める



市制施行20周年記念イベントの一環として令和7年9月に行われた「全力！よこて祭り」。盛大なフィナーレの模様

持続可能な未来の礎は先人が築き継承したわが風土

秋田県南東部に広がる横手盆地のほぼ中央に位置し、周囲を大仙市、由利本荘市、湯沢市などと接する横手市は、平成17（２００５）年10月１日、旧横手市および旧平鹿郡増田町・同平鹿町・同雄物川町・同大森町・同十文字町・同山内村・同大雄村の１市５町２村の合併により、新生横手市としての歩みを開始。令和７（２０２５）年10月１日には新市誕生20周年の節目を迎えている。

合併時の人口は10万３６５２人（※平成17年国勢調査）、面積は６９２・80㎢（旧横手市は１０９・78㎢）に拡大したが、合併前から続く人口の漸減傾向はその後も同様で、本年８月１日現在では７万５５４３人となっている（現横手市エリアの人口のピークは昭和30／１９５５年の約14万６０００人）。

秋田県は近年、47都道府県の中で最も人口減少率が高い県とされ、本年８月１日に発表された「秋田県の人口と世帯／月報」によれば、県全体の総人口は86万３５８６人。これは47都道府県のうち39位に相当する。そうした状況下、横手市は県都・秋田市（28万９１４３人／本年８月１日現在）に次ぐ人口を保っているものの、一部大都市圏以外の全国ほとんどの都市と同様、前述のように、自らも長期的な人口減少の流れの渦中にある。

しかし、平成25（２０１３）年10月20日に、故郷・旧十文字町の町議（１期）と合併後の横手市議（２期）を経て、秋田県内の首長としては当時最年少の37歳で市長選に初当選し、本年で４期14年目を迎えた髙橋大横手市長は、いたって意気軒高だ。



髙橋（たかはし） 大（だい）
横手市長



市域北部の朝倉山には明治元年の戊辰戦争で落城するまで横手城があった。写真は二の丸跡地に築かれた横手公園展望台（内部は資料館）



約450年前から行われているとされる横手の「かまくら」は毎年2月中旬の小正月の伝統行事

「人口減少率だけじゃありません。秋田県は近年、いろいろな部門での《ワースト1》があると、世間では言われています。例えば最低賃金、商業地・住宅地・工業地の地価などが、全国の最下位とされています。その上、熊の出没件数は全国有数です（笑）。

ただ、これらの事象は現代の限られた範囲内の価値観を反映したワースト評価であり、危機感はもちろん持つべきですが、やみくもに卑下する必要はない。例えば人が少ないせいか、秋田県は交通事故も犯罪件数も少ない。秋田県民は教育にあまり金をかけないという調査もあります。でも、小中高生の学力テストは常に全国上位に位置している。つまり、秋田県の子どもたちは塾にあまり行かずに、伸び伸びと育っている。それは横手市の現況とも重なります。

周囲を見渡せば、横手市には先人たちが営々と築いてくれた四季折々の美しい田園風景が、今も当たり前にある。そうした里山は食の天然素材の宝庫で、清れつな水や内陸盆地特有の1日の寒暖差は、酒やみそなどの醸造に適しており、横手市を発酵食品の伝統的先進地にする要因ともなっている。

豪雪地帯なので、冬の雪かきは大変です。しかし『かまくら』などの詩情あふれる雪遊びや、日本の原風景とされる伝統行事の数々を生み出すなど、日常生活が癒やしの要素に満ちている。

ただ、そうした魅力は価値の数値化が難しい。測定不可能なプライスレスの『魅力』なのです。だから、他の地域と背比べのような比較はできませんが、そこに生きる私たちにとっては、胸を張って自慢できる地域資源であり、誇るべき地域財産でもあります」

折しも、取材（本年7月28日）のため訪れた横手市は、57年ぶりに夏の甲子園出場を決めた秋田県立横手高校の「快挙」の話題で持ちきりだった。

「創立130年近い歴史を持つ横手高校は、県内有数の進学校ですが、スポーツの得意な地元の子たちは、他県のスポーツ有名校にスカウトされていくというのがこれまでの常態でした。だから横手高校の現在の野球部員は、地元の中学校出身の生徒たちの集団といえます。

そんな横手高校が成し遂げた快挙は、倦まずに正しく頑張り続ければ目標は達成されるという理を体現するもので、私がそうあってほしいと考えるまちづくりの姿を野球に移し替え、示してくれた貴重な事例でもあると思っています。この上、甲子園で1勝でもしてくれたら、大騒ぎになりますが、どうでしょうか」（髙橋市長）

横手高校は残念ながら1回戦で姿を消した。しかし、公立進学校の「快挙」は全国ニュースをにぎわせ、同時に「市民に爽やかな感動と未来への希望の灯をともす出来事」





この夏の横手市は「祝・57年ぶり甲子園出場 横手高校」という歓喜の声がこだました（横手市生涯学習館Ao-naロビーを2階図書館から撮影）

ともなった。

横手市には、もちろん、「測定可能な魅力（ポテンシャル）」もたくさんある。例えば、東北中央自動車道（横手ＩＣ）、秋田自動車道（横手ＩＣ）および国道13号・横手バイパスなど、重要幹線道路が交差する交通環境の良さや豊富な水資源などが相まって、横手市には五つの工業団地が立地。自動車関連産業、輸送用機械製造業、電子部品・デバイス製造業などを中心に企業の集積が進み、貴重な雇用の場を形成している。

さらに、旧横手市・増田町・十文字町の各地域など、近世から形成されてきた城下町、あるいは人・モノ・コトの集散地としてのにぎわいを継承してきた商業集積の地は、今後の振興策の必要性がそれぞれにあるにせよ、横手市に「農・商・工」のバランスの基盤を、今ももたらしていると言える。

それでも人口減少が続く一つの背景に、若者たちの止まらない流出現象がある。秋田市・大仙市・由利本荘市など県内の人口上位都市の中でも、横手市の15歳～24歳の社会減は人口比で群を抜いている。県内の自治体では大学進学率が高い横手市には、大学が立地しておらず、進学や就職のため他県に流出する若者たちが多いのだ。

「そうした現実を踏まえながらも、なるべく自然な形で人口減少を抑制していきたい。そのためには、ピンポイントで人口増だけを意識した施策を強行するより、まず足元に停滞する根本的な課題を着実に、スピード感を持って一つずつ解決していくことが重要です。

横手市にとって、地元にしかない価値測定の不可能な数々の『魅力』は地域愛の土壌となるものであり、持続可能な近未来を構築する上で、それを人口流出率の高い若者たちに周知する仕組みを作ることは、とても重要なミッションです。ただ、その『魅力』は、実の伴った行財政改革や地域振興策の積み重ねの上で初めて輝きをもって受け入れられるものです。行政が自らに痛みの伴う改革をせず夢だけ語っても、市民は納得してくれません。

特に最初の市長選は接戦だったせいか、私のそうした方針に必ずしも賛成でない議員や職員も、当初は少なくなかったと思います。しかし、目の前をふさぐ壁をとにかく一つずつ打ち壊す気持ちで、懸命に取り組みました。

最初に着手したのは、本市の基幹産業である農業基盤の強化を図るため、６次産業化やブランド化、製品を消費者に提供するまでの流れを一貫体制とするため、既存の産業経済部から農業分野を独立させて、農林部を設置したほか、市民の皆さまの顔や声を直接感じることができるように現在の本庁舎に執務室を移動しました」（高橋市長）

さらに、旧市町村の住民サービスや地域振興を担う「まちづくり推進部」を設置するなど、合併後の肥大化した組織の改革や、市民の声を政策に反映させるための体制を整備した。





横手市生涯学習館Ao-na。1階は市民交流拠点のコミュニティスクエア。ガラス壁の向こうは軽いスポーツを楽しめるアクティブエリア

全世代を引き付ける交流拠点
新感覚の駅前公共施設

「農林部では、農業政策や産業振興を図る部署に加え『マーケティング部門』や『地域価値創造戦略室』を新設しました。作物を作る

横手市

（秋田県）

市政ルポ



「横手やきそば」の名店群が出店する「横手やきそばフェスティバル」には全国からファンが大集合（2026年フェスティバルの模様）

だけでなく、消費者のニーズを捉え、合理的で『稼げる農業経営』の浸透を目指し、横手市農業の産地としての価値をより高めるべく、試行錯誤や育成の場『実験農場』も設置しました」（髙橋市長）

横手市の農業は現在、スマート農業の普及・促進のフェーズに入っており、ＩＣＴなどを活用した省力化と稼げる農業の構築を図っている。人材育成に関しても実験農場を含む「横手市園芸振興拠点センター」内に「よこて農業創生大学校（研修期間2年）」を運営。野菜や花卉類など、利益率の比較的高い作物を中心に、基本的な農業技術を徹底指導するなど、基幹産業としての農業の改革は静かに進みつつある。林業についても振興に不可欠な林道改良事業、橋梁の長寿命化事業、民有林の整備育成事業（再造林）などの周辺整備の推進をはじめ、基盤再強化への着実な動きが目立つ。

「地域の持つ測定不可能な魅力を磨き上げ、若者を中心に全世代に周知する仕組みづくり」についても、足元に横たわる課題解決への努力と並行しながら、髙橋市長は就任当初から着手してきた。

例えば、ＪＲ横手駅東口前に令和6（２０２４）年7月に完成した「横手市生涯学習館Ａｏ－ｎａ／アオーナ（地上４階）」と、ＪＲ横手駅西口から車で5分ほどの赤坂総合公園内に本年6月に完成した「ＩＲＩＳＯアリーナ横手（横手市立体育館）／※市内に立地するイリソ電子工業株式会社のネーミングライツ」などの公共施設が持つ斬新で多彩なスペックに、髙橋市長の目指す「仕組みづくり」のエッセンスを垣間見ることができる。

どちらも全世代の市民が利用可能な交流施設だが、就任直後に計画を打ち出した際には「議会からも強く反対され、10年以上もの紆余曲折」（髙橋市長）を経た難産の末に誕生している。

そのうちＡｏ－ｎａは、現在進行中の「横手駅東口第二地区第一種市街地再開発事業（令和２／２０２０年～令和９／２０２７年）」のＡ街区として建設された複合施設だ。

同再開発事業では、その他、各種民間施設や中高層住宅などを軸とするＢ・Ｃ・Ｄ街区の建設が進められ、全街区の竣工も間近だ。さらに、隣接する地区には、完成済みの「横手駅東口第一地区第一種市街地再開発事業／愛称・よこてイースト」もある。

「よこてイースト」には民間商業施設棟のほか、平成23（２０１１）年に開館した公共施設棟「横手市交流センター／ニッパツＹ２（わいわい）ぷらざ／地上４階」があって、Ａｏ－ｎａと連携しつつ、ＪＲ横手駅東口前をアクティブな交流空間とする役割を担っている。

「ニッパツＹ２ぷらざ／※市内に立地する日本発条株式会社のネーミングライツ」には、現在、市民活動スペース、横手市児童センター、不登校やひきこもりなどに悩む児童・生徒のための「こども・若者相談窓口」のほか、起業支援やインキュベーション施設などの役割を担う「Ｂｉｚサポートよこて」、市民の健康増進に資する「健康の駅よこて東部トレーニングセンター」などが入居。秋田資本のスーパー（商業棟）、各種テナントが入居する店舗棟などと共に交流空間を構築している。

Ａｏ－ｎａの２・３階には、生涯学習館にふさわしく横手図書館が入居。２階部分は一般図書フロアだが、勉強や情報検索など



ニッパツY2ぷらざ内「横手市児童センター」は横手市の子育て支援拠点施設。専任職員があらゆる子育て相談に応じる（写真は大型遊具を備えた遊戯室）



『釣りキチ三平』の作者・矢口高雄さん（増田町出身）が初代名誉館長を務めた「横手市増田まんが美術館」。膨大な原画コレクションでも知られる

に集中できる「しずかな部屋」と、平成7（1995）年開館の「横手市増田まんが美術館」（増田地域）と連携した「マンガコーナー」の存在などが若者たちに人気だ。3階は全体が児童図書フロアで、子どもや親子連れが気軽に読書を楽しめる「おはなしのへや」などがあり、ボードウォークとして使える屋外デッキにもつながっている。

また、1階ロビー（コミュニティスクエア）には、適度な音量なら楽器演奏も可能なスタジオのほか、バスケットボールやバドミントンができるアクティブエリア（屋内外）も用意されている。

交流・防災拠点としての体育館 シン・十文字拠点基本構想

「Ａｏ－ｎａは市立図書館を軸にした生涯学習館ですが、ちょっと物音を立てただけで注意されるような、厳粛な雰囲気の施設を目指してはいません。Ａｏ－ｎａの1階は市民交流の場（ロビー）で、吹き抜け構造のため2階の図書館が見上げられ、図書館からは1階ロビーの様子を見下ろすことができます。ロビーのにぎわい空間と、本来静謐（せいひつ）が基本とされる図書館空間が縦位置に同居して、自由に行き来できる。こんな構造は非常識とする意見も計画当初はありました。しかし、若者たちを中心とした全世代の市民への事前アンケートの結果などを強く反映したコンセプトに基づいており、実際に利用する市民からは、好評をいただいております」（高橋市長）



「IRISOアリーナ横手」のキャッチフレーズは「こころとからだ まちを動かす交流拠点」。横手市の新たなランドマークだ

ＪＲ横手駅東口前には元々、総合病院や大型商業施設があったが、郊外への移転や撤退が相次ぎ、空洞化が進んだ。市街地再開発の背景には国道13号・横手バイパスや秋田自動車道の開通後に激化した「郊外への商圏移動」という、大きな時代のうねりがあったのだ。

「横手駅東口の二つの市街地再開発事業は、駅前の空洞化を埋めるとともに、横手市を代表する玄関口・横手駅周辺を再活性化することで、地域振興の新たな礎にする狙いがあります。通学に鉄道を最も利用している高校生たちの放課後の居場所づくり、全世代の地域愛を醸成する空間づくり事業としても企画されました」（高橋市長）

また、二つのアリーナ（第1アリーナは最大５０００人収容可能）をはじめ、体育館に望める機能や設備が全てそろった感のあるＩＲＩＳＯアリーナ横手は、会議室やコンディショニングルーム、陸上トラックと同じ素材を使用した全長50ｍの走れる廊下、1周２７０ｍのランニングコース（廊下）、ボールを自由にぶつけてもよい外壁や、ダンス練習にも使える鏡面ガラス付きの壁のある屋外のスポーツパークなど、内側も外側も、建物全体をフル活用できるのが特徴的だ。

取材時点では、7月1日のグランドオー



バスケットボールもバレーボールも3面同時に取れるIRISOアリーナ横手の第1アリーナ。最大5000人の観客が収容可能

横手市

（秋田県）

市政ルポ

プンからようやく1カ月が経過したばかりだった。しかし、各都道府県の持ち回りで毎夏に開催され、「文化部のインターハイ」の異名を持つ大イベント「全国高等学校総合文化祭」の第50回記念大会「あきた総文2026」の主要会場の一つとして、全国から集まった高校生たちで早くも大にぎわいの様相を呈していた。

「全日本クラスの大会開催から市民の健康づくりに至るまで幅広く利用できるほか、市内外から訪れる利用者の交流スペースとして、地域の防災拠点としての各種設備も完備した、かなり画期的な体育館」と髙橋市長が自負するにふさわしいスペックが目を引く。

以上述べてきたように、横手市では現在、髙橋市長が就任以来尽力してきたさまざまな地域振興策、既存の地域資源（財産）のブラッシュアップ、若者の人口流出を抑制する仕組みづくりなどの「結果」が徐々に表れ出しており、今後のさらなる展開が期待される。

同時に、本欄が「今後の展開」に注目したいもう一つの施策に「シン・十文字拠点基本構想」がある。現横手市の中心市街地は、市域中央部のJR横手駅を中心とする横手地域（旧横手市中心部）であり、十文字地域は増田地域などと共に市域南部の市街地を形成している。

このうち増田地域には、中世以来の歴史を持つ「増田の町並み（横手市増田伝統的建造物群保存地区／中七日町通り／現県道108号線）」が健在。酒造業で栄え、北都銀行の前身・羽後銀行の発祥地でもあったように、近代には県内有数の商業地を形成していた。

この増田地域の西側に位置し、増田街道で結ばれる十文字地域は、羽州街道と増田街道が十文字に交わることからその地名が生まれた。そのため十文字地域は、特に近世以降、人・モノ・コトが集散するにぎわいを見せてきた。

現在も東北中央自動車道、国道13号、国道342号、JR奥羽本線（十文字駅）などにより、岩手県内陸部や宮城県沿岸部などとも直結する交通の要衝で、地域内には「道の駅十文字」もある。髙橋市長はこの十文字地域を、改めて横手市の南の玄関口（拠点）として活性化するため「シン・十文字拠点基本構想」を本年3月に策定した。

「事業対象地は統廃合された旧十文字第一小学校跡や旧十文字文化センター跡を含むエリアで、ここに新たなまちの顔を構築していきます。事業としては緒に就いたばかりですが『シン・十文字拠点基本構想』のシンには『新』『芯』『進』の意味があります。十文字地域が横手市の新しい中心軸、時代的な逆風にもめげず進化する横手市の南の拠点になることを心から願っています」（髙橋市長）

出口の見えない人口減少などの課題にもひるまず、地域の魅力の磨き上げを芯に据え、豊かな発想力と実行力で挑んで、新たな価値（にぎわい）を近未来に付加しようとする横手市のまちづくり。今後の推移を、大いに注目していきたい。

（取材・文＝遠藤隆／取材＝令和8年7月28・29日）



「シン・十文字拠点基本構想」事業予定地周辺では老朽公共施設の更新工事が既に進行中（旧十文字西中学校を利用した十文字西スポーツセンター）



重伝建選定の「増田の町並み」。主屋の背後に土蔵を建て、周囲を上屋建物で覆う内蔵は雪国特有の形式で「増田の町並み」の特徴の一つでもある